

1. これは、あなたの父祖の神、主が、あなたに与えて所有させようとしておられる地で、あなたがたが生きるかぎり、守り行なわなければならないおきてと定めである。
2. あなたがたが所有する異邦の民が、その神々に仕えた場所は、高い山の上であっても、丘の上であっても、また青々と茂ったどの木の下であっても、それをことごとく必ず破壊しなければならない。
3. 彼らの祭壇をこわし、石の柱を打ち砕き、アシェラ像を火で焼き、彼らの神々の彫像を粉碎して、それらの名をその場所から消し去りなさい。
4. あなたがたの神、主に対して、このようにしてはならない。
5. ただあなたがたの神、主がご自分の住まいとして御名を置くために、あなたがたの全部族のうちから選ぶ場所を尋ねて、そこへ行かなければならない。
6. あなたがたは全焼のいけにえや、ほかのいけにえ、十分の一と、あなたがたの奉納物、誓願のささげ物、進んでささげるささげ物、あなたがたの牛や羊の初子を、そこに携えて行きなさい。
7. その所であなたがたは家族の者とともに、あなたがたの神、主の前で祝宴を張り、あなたの神、主が祝福してくださったあなたがたのすべての手のわざを喜び楽しみなさい。
8. あなたがたは、私たちがきょう、ここでしているようにしてはならない。おのおのが自分の正しいと見ることを何でもしている。
9. あなたがたがまだ、あなたの神、主のあなたに与えようとしておられる相続の安住地に行っていないからである。
10. あなたがたは、ヨルダンを渡り、あなたがたの神、主があなたがたに受け継がせようとしておられる地に住み、主があなたがたの回りの敵をことごとく取り除いてあなたがたを休ませ、あなたがたが安らかに住むようになるなら、
11. あなたがたの神、主が、御名を住まわせるために選ぶ場所へ、私あなたがたに命じるすべての物を持って行かなければならない。あなたがたの全焼のいけにえとそのほかのいけにえ、十分の一と、あなたがたの奉納物、それにあなたがたが主に誓う最良の誓願のささげ物とである。
12. あなたがたは、息子、娘、男奴隷、女奴隷とともに、あなたがたの神、主の前で喜び楽しみなさい。また、あなたがたの町囲みのうちにいるレビ人とも、そうしなさい。レビ人にはあなたがたにあるような相続地の割り当てがないからである。
13. 全焼のいけにえを、かつて気ままな場所でささげないように気をつけなさい。
14. ただ主があなたの部族の一つのうちを選ぶその場所で、あなたの全焼のいけにえをささげ、その所で私が命じるすべてのことをしなければならぬ。
15. しかしあなたの神、主があなたに賜った祝福にしたがって、いつでも自分の欲するとき、あなたのどの町囲みのうちでも、獣をほふってその肉を食べることができる。汚れた人も、きよい人も、かもしかや、鹿と同じように、それを食べることができる。
16. ただし、血は食べてはならない。それを地面に水のように注ぎ出さなければならない。
17. あなたの穀物や新しいぶどう酒や油の十分の一、あるいは牛や羊の初子、または、あなたが誓うすべての誓願のささげ物や進んでささげるささげ物、あるいは、あなたの奉納物を、あなたの町囲みのうちで食べることはできない。

18. ただ、あなたの神、主が選ぶ場所で、あなたの息子、娘、男奴隷、女奴隷、およびあなたの町囲みのうちにいるレビ人とともに、あなたの神、主の前でそれらを食べなければならない。あなたの神、主の前で、あなたの手のすべてのわざを喜び楽しみなさい。
19. あなたは一生、あなたの地で、レビ人をないがしろにしないように気をつけなさい。
20. あなたの神、主が、あなたに告げたように、あなたの領土を広くされるなら、あなたが肉を食べたくなったとき、「肉を食べたい。」と言ってよい。あなたは食べたいだけ、肉を食べることができる。
21. もし、あなたの神、主が御名を置くために選ぶ場所が遠く離れているなら、私があなたに命じたように、あなたは主が与えられた牛と羊をほふり、あなたの町囲みのうちで、食べたいだけ食べてよい。
22. かもしかや、鹿を食べるように、それを食べてよい。汚れた人もきよい人もいっしょにそれを食べることができる。
23. ただ、血は絶対に食べてはならない。血はいのちだからである。肉とともにいのちを食べてはならない。
24. 血を食べてはならない。それを水のように地面に注ぎ出さなければならない。
25. 血を食べてはならない。あなたも、後の子孫もしあわせになるためである。あなたは主が正しいと見られることを行なわなければならない。
26. ただし、あなたがささげようとする聖なるものと誓願のささげ物とは、主の選ぶ場所へ携えて行かなければならない。
27. あなたの全焼のいけにえはその肉と血とを、あなたの神、主の祭壇の上にささげなさい。あなたの、ほかのいけにえの血は、あなたの神、主の祭壇の上に注ぎ出さなければならない。その肉は食べてよい。
28. 気をつけて、私が命じるこれらのすべてのことばに聞き従いなさい。それは、あなたの神、主がよいと見、正しいと見られることをあなたが行ない、あなたも後の子孫も永久にしあわせになるためである。
29. あなたが、はいつて行って、所有しようとしている国々を、あなたの神、主が、あなたの前から断ち滅ぼし、あなたがそれらを所有して、その地に住むようになったら、
30. よく気をつけ、彼らがあなたの前から根絶やしにされて後に、彼らにならって、わなにかげられないようにしなさい。彼らの神々を求めて、「これらの異邦の民は、どのように神々に仕えたのだろう。私もそうしてみよう。」と言わないようにしなさい。
31. あなたの神、主に対して、このようにしてはならない。彼らは、主が憎むあらゆる忌みきらうべきことを、その神々に行ない、自分たちの息子、娘を自分たちの神々のために、火で焼くことさえしたのである。
32. あなたがたは、私があなたがたに命じるすべてのことを、守り行なわなければならない。これにつけ加えてはならない。滅らしてはならない。

説教

申命記 12 章の後半では、カナンでの生活上の規則が教えられます。これからカナンに入ったら、長年そこに存在してきたカナン人の宗教の礼拝施設をことごとく破壊して、イスラエルは新たな礼拝の生活を始めるよう命じられました (1-3)。

彼らの新たな礼拝場所は、「主がご自分の住まいとして...選ぶ場所」です (5)。そして、礼拝後には「祝宴を張り」、家族や奴隷、さらにはレビ人と一緒に食事をしながら神に感謝するように、と教えられました (7,12)。

礼拝の本質は、いけにえをささげて献身することです。礼拝では動物のいけにえをささげるのですが、それと紛らわしいこととして、礼拝のいけにえをささげるのではないけれども、普通に食肉として動物を屠って食べる場合があります。とりわけ、定められた場所以外で動物を屠る場合には、異教との関わりが疑われるので紛らわしくなります。異教の礼拝所は、「高い山の上」や「丘の上」、さらには「青々と茂った木の下」など、あちこちに散在していました(2)。それで、「全焼のいけにえを、かって気ままな場所でささげないように気をつけなさい」と警告されていたほどです(13)。

これに関して、15節では「いつでも自分の欲する時、あなたのどの町囲みのうちでも、獣を屠ってその肉を食べることができる」と言われます。これは礼拝ではなく、単に食用として屠るのですから、どこでも屠ることが許されるというわけです。神の民も、そうでない者も、すなわち、「汚れた人も、きよい人も」食べることができます。食用の「かもしかや、鹿と同じように」屠って食べてよいと言うのです(15)。

この15節の規定は、20節以降でより詳しく解説されます。「あなたの神、主が、あなたに告げたように、あなたの領土を広くされるなら、あなたが肉を食べたくなったとき、『肉を食べたい。』と言ってよい。あなたは食べたいだけ、肉を食べることができる。」(20) これを読んでいて、まず嬉しくなるのは、「あなたは食べたいだけ、肉を食べることができる」という許可です。21節でも繰り返し「(牛でも羊でも)食べたいだけ食べてよい」と言われます。肉が食べなくなったら、遠慮せず、いくらでも「肉が食べたい」と言って、「食べたいだけ食べてよい」というのです。要するに、焼肉の食べ放題ということなのです。

今は、モアブの草原で肩を寄せ合いながら一つ所に集まって宿営を張っているのですが、これから約束の地カナンに入って行けば、どんどん各地に散らばって行って、「領土を広く」占領するようになります。すると、牧草地をいくらでも広く確保することができて、飼育する家畜も当然増えていきます。生活が豊かになるのです。これまでは、荒野で、生きるのに必要最小限の天からの糧を頼りに、あるいは乏しい限られた食糧を分け合って食べてきたのですが、これからは、見渡す限り広大な土地をそれぞれ確保して、いくらでも生産量を上げていくことが可能です。要するに、生活が豊かになるのです。

カナンに入れば必ずそうすると約束されているのですが、問題は、その際にどう生活すればよいのかということです。これに関して、モーセは、約束の地カナンでの生活の豊かさを、それこそいくらでも豊かに享受してよいと言います。肉を食べたければ、いくらでも自分の住む所で屠って食べてよいと言います。勿論、5節、11節、13節にあるように、「礼拝」は一つの所に集まって礼拝しなければならないのですが、「肉を食べる」という「生活」は、それぞれの場所で自由に「食べてよい」のです。

これは、人々の生活を顧みてくださる神の恵みです。と言うよりは、神を第一とし、礼拝を重んじる神の民に、神が与えてくださった神の恵みです。十戒を守り、第一戒と二戒に従って神を正しく礼拝することは、何より大切なことです。そして、神を礼拝する者に、神はその生活を豊かに祝福してくださるのです。ただし、いくら思いのまま自分の所で肉を屠って食べてよいと言っても、全くの無秩序でいいというわけではありません。

まず、自分の「町囲みのうちで」食べる場合、「あなたの穀物や新しいぶどう酒や油の十分の一、あるいは牛や羊の初子…」といった、礼拝でささげる「いけにえ」には手をつけてはならない、と命じられます(17)。礼拝のささげ物をつい勝手に食べてしまうなど言語道断な話ですが、自分の生活の場で肉を屠って思いのまま食べることを許可されているとはいえ、そこはあくまで生活の場なのであって、誤解してはなりません。礼拝は「主が選ぶ場所」に行き、そこでいけにえをささげて礼拝しなければなりません。

もう一つは、「血は食べてはならない」との秩序です。「ただし、血は食べてはならない。それを地面に水のように注ぎ出さなければならない。」(16) 23節ではこれを詳しく解説します。「ただ、血は絶対に食べてはならな

い。血はいのちだからである。肉とともにいのちを食べてはならない。血を食べてはならない。それを水のように地面に注ぎ出さなければならない。血を食べてはならない。あなたも、後の子孫もしあわせになるためである。あなたは主が正しいと見られることを行なわなければならない。」(23-25) 血を流すことで「いのち」が失われます。血は動物の「いのち」と考えられました。そして、「いのち」は神に属します。神こそ「いのち」の唯一の主です。「いのち」は神に返さなければなりません。それで、「いのち」である血を人が食べることは許されず、「地面に水のように注ぎ出さなければならない」のでした。そして、地面に血を注ぎ出すことで、異教の祭壇の上に注ぐことは防がれました。こうしたカナンでの食事のあり方は、いくらでもたらふく食べて生活することを許されている一方で、同時に、神のみこころに沿って、秩序ある日常生活を送らなければならないことを教えています。

まずは、真の礼拝の邪魔となる異教の礼拝所を徹底的に取り壊して、神の選ぶ場所に行って礼拝します。礼拝後は、持ち寄った恵みの糧を隣人と分かち合って食事をし、日常生活では、神にささげるべき献金には手をつけず、異教と混同されないよう「血」を避けて食事をします。

以上のことを、モーセはこう総括します。「あなたは主が正しいと見られることを行なわなければならない。」(25) 「気をつけて、私が命じるこれらのすべてのことばに聞き従いなさい。それは、あなたの神、主がよいと見、正しいと見られることをあなたが行ない、あなたも後の子孫も永久にしあわせになるためである。」(28) まずは礼拝、そして次には日常生活と、すべて「主がよいと見、正しいと見られること」を行わなければならないということです。

続く 29-30 節では、カナンの土着宗教に惑わされないよう警告されます。「よく気をつけ、彼らがあなたの前から根絶やしにされて後に、彼らにならって、わなにかげられないようにしなさい。彼らの神々を求めて、『これらの異邦の民は、どのように神々に仕えたのだろう。私もそうしてみよう。』と言わないようにしなさい。」そして、こうしたカナンの土着宗教では「自分たちの息子、娘を自分たちの神々のために、火で焼くことさえし」て「主が憎むあらゆる忌み嫌うことをした」とその正体を明かします。

御利益を売り物とするカナン人の宗教は、一見魅力的に見えるのですが、その行き着く先には、子どもを人身御供にするなど「主が憎むあらゆる忌み嫌うこと」があるだけで、その故に、結局、彼らは神の怒りを受けて「根絶やしにされる」末路を迎えることとなります。それを承知した上で、それでも滅びたかったら彼らに倣えばいいし、そうなりたくなかったら、よくよく注意するように、というわけです。当時、アモン人は、彼らの神モレクに子どもを人身御供としてささげました(レビ記 18:21)。週報の表紙に絵を載せておきましたが、モレクは、雄牛の頭を持った青銅の像で、モレクの信者たちは、その突き出した手の上に子供をのせ、下から火をたいていけにえとしました。その際、モレクの祭司たちは、太鼓をたたき続けて子供の叫び声を消し、両親の悲しみを和らげたそうです。エリシャの時代、イスラエルに負けそうになったモアブの王は、形勢逆転を祈願し、自分の長男を全焼のいけにえにして、モアブの神ケモシュにささげました(Ⅱ列王 3:27)。

自分たちの安全にせよ、御利益にせよ、要するに、自分たちの欲の実現のためには、我が子さえ殺して犠牲にする、それがカナンの土着宗教の本質なのです。何だか原発の思想に通じるものがあります。世の異教邪教の本質は、結局は尽きることなき人間の欲望なのです。「彼らの神は彼らの欲望」です(ピリピ 3:19)。自分たちの「欲」を実現してくれる、それが彼らの神です。彼らは、日々、日夜、昼も夜も、自分の「欲」の実現のために熱心です。「自分の欲に仕えているのです」(ローマ 16:18)。

イスラエルの神は、これに正面から立ち向かいます。神と人を愛せよ、これが、イスラエルの神、主の、ただ一つの教えなのです。